

食料格差を疑似体験

室蘭・海星高でワークショップ



食料格差の現実を疑似体験する生徒ら

室蘭市高砂町の海星学院高校(堺俊光校長、240人)で28日、食事を通して世界の貧困の現状を学ぶワークショップ「ハンガーバンク」が開かれた。生徒は疑似体験によって、世界の食料格差についての考えを深めた。

イオン(本社千葉県、岡田元也取締役兼代表執行役社長)と伊藤園(本社東京、本庄大介代表取締役社長)が協賛。同校では今回が初めての試みで、世界食料デー(10月16日)にちなんで実施した。

1、2年生139人が参加。くじ引きで三つの階層に分かれて食事した。高所

得層(世界の人口の15%)はエビチリや肉団子、果物、お菓子などを好きなように食べ、中所得層(同25%)にはプロセスチーズ、バターロール、コンソメスープが一つずつ、男子、女子の順に配られた。低所得層(同60%)は食パン1切れと水を男子が口にした後、女子にも配布された。

高所得層グループの内池向日葵さん(2年)は友人と楽しく食事していたが、同時に申し訳なさも込み上げていたという。「食べ物が無駄にはできないと思いました。私にもできることを実践したい」と話していた。(林帆南)